

# 「第三項理論」批判

—文学教育にカント哲学は何ができるか?—

## Critique of Tanaka Minoru's "Dai-San-Kou" Theory

-What can Kant's Philosophy do for literary education?-

佐藤 宗大 (作新学院大学人間文化学部)

### はじめに

本稿では、文学研究者である田中実の提唱する「第三項理論」と呼ばれる文学研究および国語教育研究上の論説について、その構造と問題意識を、18世紀ドイツの哲学者カントの議論を用いて整理し、議論することを目的とする。

国語教育における「文学」の役割とは何か。あるいは、「文学」に何ができるのか。平成29年告示の学習指導要領での内容改訂を受けて、国語教育や文学研究の領野で、より切実な問題として受け取られている。

「社会に開かれた教育課程」、そしてアクティブ・ラーニングの導入。「予測困難な時代」を生き抜く「資質・能力」を育てるために、今般の改訂は、子供たちの未来だけではなく、教育に携わる大人たちにも、これまでとは違う何かが期待されている。とりわけ国語科では、いわゆる「チョーク・アンド・トーク」形式の授業への反省から、主体的な意見形成や話し合い、さらに情報整理の方法など、児童・生徒が「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力<sup>1</sup>」を、自ら行動し身に付けるということが強く意識された構成となっている。その際たるものが、高等学校国語科における科目再編だろう。今般の改訂では、高等学校国語科において選択科目として「論理国語」「国語表現」が新設された。前者では論理的思考、後者では言語を用いたコミュニケーション能力の育成が期待されており、高大接続改革の流れと相俟って、より「主体的」かつ「実践的」な国語的能力の育成をねらいとした構成となっている。

<sup>1</sup> 文部科学省(2018a), p.11 なお以下、小学校・中学校・高等学校で内容の重複がある場合、(2018a)からの引用で代表することとする。

今般の改訂自体は、教育の在り方を社会と接続させ、学校教育をより有意義なものにしていこうとする点で、たいへん評価できるものだ。しかし、実際に今般の改訂を教育実践に繋げていく上では、課題となる点が二つ指摘できると考える。

第一に、そもそも、児童・生徒の「主体性」を育てるとはどういうことなのか。教育指導要領では繰り返し児童・生徒の「主体性」が強調され、様々に主体的な「資質・能力」が示されている。しかし、その主体性とは何なのか、そしてそれをどのように育てれば良いのかについては、「児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる」<sup>2</sup>ということが示されるのみである。それでは、教師はどのようにその主体性を捉え、伸ばしていけばいいのか。例えば、国語科では、話し合いや発表といった活動が重視されている。それでは、話し合いで積極的に発言できない子どもや、発表資料がうまくまとめられない子どもは、主体性がないと捉えて良いのだろうか。あるいは、主体的な意見を形成し話し合うことと、単なる感想の交換とを、どのように見分け、後者に陥らない授業を展開できるのか。こうした問題を乗り越え、真に「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、そもそも、その主体の在り方や主体性それ自体を理解する必要があるのではないだろうか。

第二の課題は、国語教育の立場から、「文学」をどのように扱っていくべきなのかということだ。今般の改訂において、国語科では先述の通り「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を国語科として育成すべき資質・能力として掲げ、全体的に言語運用能力の育成を強く意識した構成となっている。そうした中、文学的文章については、我が国の「言語文化」に関する内容が割り当てられ、全体として情緒や言語感覚等の側面が強調された扱い方になっている印象を受ける。しかし当然のことながら、文学的文章に触れる、ということは、必ずしも情緒や言語感覚の育成に終始するものではない。もちろん今般の指導要領においても、文学的文章を扱う際には情緒面での育成のみを意識せよ、と言っているわけではない。いま文学教育は、教育指導要領を超えて、独自の価値を提示・発展させる余地が十分にあるということになる。

では、どのように文学的文章を読むことが、文学を情緒・言語文化の育成に終始させない取り組みとなるのだろうか。新しい学習指導要領の問題意識においてとらえるなら、「主体的・対話的で深い学び」としての文学教育とはいったい何なのだろうか。そのための方法論が必要とされているように思われる。

そこで注目したいのが、文学研究者である田中実の提唱する「第三項理論」である。第

<sup>2</sup> 文部科学省（2018a）, p.4 なお、「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科ならではの物事を捉える視点や考え方。（ibid.）

三項理論とは、作品と読み手との関係性に“作品それ自体”という完全には捉えきれない対象を措定することにより、ストーリーではなく、世界構造や物語の仕掛けから作品を読み解くことを狙いとした主張である。田中によれば、文学作品は客観的对象として、そのすべてを捉えきれものではない。したがって、我々にとっての作品の読みとは、あくまで「文章それ自体」から触発され、我々自身が形成したものである。であるから、文章の読みは、一意的に定まることはない。しかし、「文章それ自体」が存在するとすれば、それぞれの読み方がそれぞれに完全に正しいということもない。文章の読みはその折々の読み手の在り方を反映したものであり、したがって、常に更新の可能性を秘めている。つまり、文章を読むということは、同時に今の自分の在り方に触れることであり、さらに読みの更新が起きるということは、自身の在り方が変化したということでもある。田中はこの読みの更新を「自己倒壊」というタームで表現しており、自身の理論において重要な概念として強調している。

言わば田中の主張は、文学の読みをある種の動的な成長モデルとして捉えるものであり、特に国語教育の領域から注目を集めてきた。しかし、その一方、第三項理論はある種の異端理論として、それに反目する研究者、あるいは国語教育者も少なくない。その理由は大きく二つある。第一には、田中の理論が形而上学的な構造を取っており、文学理論でありながら包含する内容があまりに広く、容易に理解できないということ。そして第二に、独自のタームが多く、新規参入者への障壁が高いということ。難波博孝によれば、「第三項理論」には「個別文学作品論」「一般文学論」「読むこと教育論」「哲学論」という、多様で、そして重要な理論領域が複数含まれている<sup>3</sup>。難波はそれを踏まえた上で、近年日本で注目を浴びつつある新実在論を手がかりとして、「第三項理論」を理解・整理する道を提示した。詳細については後述するが、新実在論、とりわけマルクス・ガブリエルの「意味の場 (field of sense)」と「無世界説 (no-world-view)」を柱とした議論は、確かに田中の主張に合致する側面もある。しかし、ガブリエルを第三項理論研究の補助線として活用することには問題があると私は考える。

難波への対案として、筆者は18世紀ドイツの哲学者、カントの理論を援用して臨みたい。カントの「物自体 (Ding an sich)」を措定する理論体系は、田中の主張と共通する部分が多いと筆者は考えるからだ。

本稿の議論の流れは以下の通りである。まず、田中実の言説にしたがったかたちで、第三項理論を概説したのち、それがどのように受容されているかを確認する。そして、ガブリエルおよびカントを補助線として第三項理論を整理し、その利点と問題点を検討する。

---

<sup>3</sup> 難波 (2018) , p.18-9

なお、慣例に倣い、カントの著作の引用については、アカデミー版の巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示す。特に、『純粹理性批判 (*Kritik der reinen Vernunft*)』(1781/87)からの引用については、巻数の代わりに第一版(1781)をA、第2版(1787)をBとし、それぞれのページ数をアラビア数字で示すこととする。また、本稿中のカント著作の引用文については、邦訳を参考として、筆者が必要に応じて修正を加えている。

## 1 第三項理論とは何か

### 1.1 「モダン」と「ポストモダン」

第三項理論への注目の前提には、文学研究および文学教育における、「モダン」および「ポストモダン」の超克という、極めて独特な問題意識が存在した。しかし、その概念理解は、思想史上のそれとは異なった、一種独特な仕方で与えられているため、注意が必要である。

第三項理論に関する論考を数多く掲載してきた『日本文学』誌上の言説を手がかりとするならば、「モダン」とは、主体に対しての客体の現れ方が一様に定まる、さらに言えば、一様に定まら「なければならぬ」とする思想体系、あるいは思考様式である。一方、「ポストモダン」は、主体に対してそれぞれの仕方で認識が立ちあられ、それぞれに等しい価値を持つ、という思想体系である。この定式化の背景には、柄谷行人、蓮見重彦、そして浅田彰などに象徴される、1980年代以降の日本における言論状況が存在する。田中自身、蓮田の「表層批評」に対して自らの読みを「深層批評」であると表現しており<sup>4</sup>、また須貝千里は、「読むこと」の内実について、モダンとポストモダンとの境界は1980年代に存在すると言及している<sup>5</sup>。

つまり、第三項理論は、1980年代以降の日本の言論状況と、それに影響を受けた国語教育上の混迷を乗り越える理論として、注目を浴びるに至ったということになる。より具体的に言うならば、「正解の解釈が唯一存在する」、あるいは「読み手毎に読み方が存在する」という指導上の立場を乗り越えた新しい国語教育の理論として、第三項理論は期待を集めていたのである。

### 1.2 第三項理論

「モダン」および「ポストモダン」の超克という課題に対し、近代日本文学者としての田中が注目したのは、「文学作品をどのように捉えるか」という問題だった。つまり、「モ

---

<sup>4</sup> 田中(2018), p.8など。

<sup>5</sup> 須貝(2017), p.42

ダン」の捉え方も、「ポストモダン」の捉え方も、近代日本文学を捉えるには不十分であると田中は考えたのである。

田中によれば、近代日本文学の特徴は、その物語が第三者の視点から語られていること、すなわち客観描写であることにある。常に自分の視点から語られる私小説とは異なり、近代日本文学は常に「作中人物ではない何者か」によって、作中人物の語りや物語全体が相対化される。つまり、物語として表面に現れていない次元、あるいは、作中人物の視点からは届き得ない次元が存在することになる。したがって、近代日本文学を読むということは、この相対化された語りの次元から物語の仕掛けを読むことだと考えられる。田中は、この物語の仕掛けを「メタ・プロット」と、そして、そのメタ・プロットの次元から物語を進めている存在を、「機能としての語り手」と呼んでいる。

しかし、メタ・プロットの次元から読むということは、必ずしも、作品を完全に掌握することにはならない。むしろ、作品の十全な理解は構造的に不可能であると田中は主張する。なぜなら、対象の認識に届き得ない次元が存在するという事は、読み手にとっても同じことであるからだ。ここで田中は、作品に二通りの存在様式があると主張する。まず一つは<本文>である。これは読み手によって捉えられた文章内容であるが、「常に読書主体の時空間に拘束される一回性の脳内現象、<読みのアナーキズム>としてしか現れない<sup>6</sup>」。もう一つの存在様式は、<原文>である。こちらは「実体としては存在しないこの客体そのもの<sup>7</sup>」「了解不能の<<他者>><sup>8</sup>」として説明され、言わば、永遠に認識し得ない「作品それ自体」である。田中によれば、<本文>、すなわち「文章それ自体」から触発されてさまざまな文章内容が現れる一種の仮想空間が「第三項の領域」であり、機能としての語り手は、この第三項の領域から物語の構造としてのメタ・プロットを読んでいくのである。

つまり、仕掛けの次元、つまりメタ・プロットの次元から作品を読んでも、それはそれぞれの読み手にとってそのように現れている、ということに過ぎない。逆に言えば、その都度の読みというのは、自分の在り方を反映したものであり、読みの更新が起きるということは、そこで自らの在り方もまた更新されているのである。田中は、「第三項の領域」を導入することによって可能となるこうした読み＝自己の更新を、「自己倒壊」と呼び、重要視している。

以上のことを踏まえ、田中は、「モダン」および「ポストモダン」について次のように批判する。まず前者については、作品の解釈について唯一絶対のものがあるとする点に異

<sup>6</sup> 田中 (2017) , p.4

<sup>7</sup> ibid.

<sup>8</sup> ibid., p.3

議を唱える。確かに、「作品それ自体」として、読み手に内容を与える対象は存在する。しかし、それは決して到達しうるものではない。したがって、客観的に到達しうる唯一の読み方、というものは端的に不可能なのである。一方、後者については、読みの多様性の在り方が批判の対象となる。「ポストモダン」的に、どの読み方にも対等な妥当性を認めるとする。そうすると、物語は単なる「それぞれの読み方」の次元においてのみ受け取られ、「自己倒壊」が産まれる余地がなくなってしまう。確かに、田中にとっても読みは多様でありうる。しかし、「第三項の領域」が存在することにより、読み手は絶えずその読みの更新を迫られる。そして、このように見直しを絶えず迫られるということは、異なる読み方と相互に触発された結果、言わば「読みの公共空間」を構築することをも可能とする。もし、「ポストモダン」的にそれぞれに対等な妥当性を認めてしまうと、こうした読み同士の相互関係は生じ得ないのである。

以上、第三項理論について、田中の言説をもとに整理した。

第三項理論の説明にあたっては、これまで、提唱者である田中実の言説を参照するという方法が多く取られてきた。しかし、「不可知な対象」を措定し、要請しているというその特性もあいまって、容易には理解できない理論として受け取られてしまっている。そしてそのことが、第三項理論を限られた研究者によってのみ信奉されている理論であるかのように見せ、ある種の反発をも産み出してしまっている。

したがって、第三項理論には、田中実以外に参照できる理論が必要である。それによって、第三項理論を文学以外の仕方で整理し、その受容の可能性について検討することが可能となるのである。

次章以降では、第三項理論の整理にあたり、哲学を参照した主張を概観し、検討する。

## 2 第三項理論と新しい実在論 — 難波博孝 (2018) の提案 —

近年の研究で大きく注目されるのが、難波博孝の研究である。難波は、第三項理論が含む学問領域を整理した上で、第三項理論を、新しい実在論、とりわけマルクス・ガブリエルの論説によって説明しようと試みている。

主張の前提として、ガブリエルが乗り越えるべきと考えている哲学上の立場が二つある。一つは「この世界全体についての理論を展開しようとする試み<sup>9</sup>」としての形而上学であり、もう一つが構築主義である。これは、およそ事実など存在せず、私達が、私達自身の重層的な言説ないし科学的な方法を通じて、いっさいの事実を構築していると考え

---

<sup>9</sup> *ibid.*, p.9

場と定義されている<sup>10</sup>。

ガブリエルの主張は、以下の3つのテーゼから構成される。

1. 世界は存在しない<sup>11</sup> (= 否定的存在論の主命題)。
2. 限りなく多くの意味の場が必然的に存在する<sup>12</sup> (= 肯定的存在論の第一主命題)。
3. どの意味の場もひとつの対象である<sup>13</sup> (= 肯定的存在論の第二主命題)。

意味の場とは、「何らかのもの、つまりもろもろの特定の対象が、何らかの特定の仕方  
で現象してくる領域<sup>14</sup>」であり、何かが存在するという事は、まさに「何らかの意味の  
場に現われること<sup>15</sup>」に他ならない。また、この意味の場について、ガブリエルは、「魔女」  
を例に出して、次のように説明する。すなわち、魔女は「地球 (上)」という意味の場には  
現象しないが、「初期近代の魔女狩り実行者のもっていた表象体系」には現象する<sup>16</sup>。また、  
どのような意味の場が存在するかについては、「人間による認識の営みの現実全体<sup>17</sup>」  
が必要だとする。ガブリエルはこれ以上の言明を行っていないが、以上から、意味の場の  
設定は、言わばその状況の文脈に左右されるのだと考えて良いだろう。以上から、ガブリエル  
の主張は、「意味の場」の存在論とまとめることができる。

難波は、ガブリエルの理論が、第三項理論と次の二つの点を共有していると考え。第一に、  
双方が抱える問題意識であり、第二に、存在をメタ的視点から捉えて構造化している  
点である。しかし、筆者は、そのいずれの点からも、ガブリエルを第三項理論の補助線  
として援用することは、必ずしも適切な選択ではないと考える。

まず、第一の点について、難波は、「新しい実在論」について、「自然主義=科学主義=  
モダン」と「構築主義=ポストモダン」の両方を乗り越えようとしたものとして理解して  
いる<sup>18</sup>。しかし、このような定式化は、あまりにガブリエルを第三項理論に引き寄せよう  
とし過ぎているように思われる。再度確認すると、ガブリエルが乗り越えようとしている  
ものは、形而上学と構築主義であった。言い換えるなら、すべてのものが帰属する対象と

<sup>10</sup> *ibid.*, p.11

<sup>11</sup> ガブリエル (2018) , p.115

<sup>12</sup> *ibid.*

<sup>13</sup> *ibid.*, p.116

<sup>14</sup> *ibid.*, p.102

<sup>15</sup> *ibid.*, p.97

<sup>16</sup> *ibid.*, p.133

<sup>17</sup> *ibid.*, p.127

<sup>18</sup> 難波 (2018) , p.22

しての世界が存在するということと、客観普遍的尺度によってのみ世界が成立しているというこの双方を、ガブリエルは否定しようとしている。すなわち、ここで問題とされているのは、モダンとポストモダンというような対比的なものではなく、そもそも次元の異なるものなのだ。また、ポストモダン＝構築主義という理解をひとまず受け容れるとしても、モダン＝自然主義＝科学主義とすることには大きな問題がある。なぜなら、自然主義とは、世界観の提示と判断基準の規定という点で、形而上学と構築主義双方に関わるものであるからだ。

第二の点についても、ガブリエル解釈上の問題を指摘しておきたい。それは、ガブリエルの理論では、意味の場の外部領域が存在しない。つまり、肝心の「第三項の領域」が存在しない。むしろ、ガブリエルにとって、意味の場の外部を措定する考え方は、全体としての「世界」が存在するという、形而上学の立場である。また、「読み」という仕方での読み手の認識が常に問われるという点では、構築主義的な要素すら指摘しうるだろう。つまり、第三項理論とガブリエルの主張との間には、次のようなディレンマが生じることになる。ガブリエル的な存在理解に立脚するのであれば、第三項理論を否定せねばならない。一方、第三項理論に立脚するのであれば、ガブリエルは援用しうる味方ではなく、現代哲学からの刺客ということになる。よって、単に多次的なモデルを提示しているという特徴にフォーカスしてガブリエルを援用することには、危険が伴うのである。

では、第三項理論は、どのような理論を援用することで、より見通しよものとなりうるだろうか。次章では、難波の提案したガブリエルの援用以外による、第三項理論の定式化への道を探る。

### 3 カント的な見地からの第三項理論

難波の議論は、第三項理論を整理し、定式化する上で極めて重要な条件を示してくれた。まず第一に、対象を認識するにあたって、主客の二項関係の外部領域を要請する理論であること。そして第二に、認識主体が、多様に現れる世界の現れ方を比較しうるようなモデルを提供してくれること。さらに、第三項理論が近代小説の「読み」に関するものであることから、筆者は、もう一つの条件を付け加えたい。それは、近代的自我を基礎づける理論であること。そして、以上3つの要求を満たす理論として、私は、18世紀ドイツの哲学者であるカントの学説を採用したい。結論を先取りすれば、私は、このカントの「物自体」、あるいは「観知界」が、第三項理論の「第三項（の領域）」ときわめて近い機能を有していると考えられる。

### 3.1 カントの認識と行為選択の理論

『純粹理性批判 (Kritik der reinen Vernunft、以下『第一批判』)』(1781/1787)において、カントは、人間的理性の限界を明らかにし、それによって、新たな形而上学を提示することを目指していた。そのカントの哲学を特徴付けるのは、経験的認識の及ばない対象が、私達の経験的認識の背後で、それを境界付け、規定しているのだという考え方である。カントは、その不可知の対象を、認識論に関しては「超越論的对象=X」や「物自体」と呼ぶ。また、こうした不可知の対象は、理性固有の領域、「叡知界 (mundus intelligibilis)」として、カントの道徳理論において積極的な役割を与えられるようになる。

そもそも、カント哲学の「批判 (Kritik)」とは、理性能力一般の批判であった<sup>19</sup>。理性は「原理の能力 (Vermögen der Prinzipien)<sup>20</sup>」として、経験の限界を超えて、無条件的なものへと推論を止めどなく展開していく。その結果、理性は、経験的には到達し得ない概念としての魂・世界・神を形成する。しかし、カントによれば、それらは何か実在性のあるものではなく、単なる「仮象 (Schein)」に過ぎない。旧来の形而上学は、そうした理性の産み出した仮象を、言わば独断的に信じ込み、規範としてきたのである。一方、自然科学を規範として、経験的なもののみによって世界を認識しようとしても、不首尾に終わる。とりわけ、問題が道徳的規範の構築に及ぶと問題は深刻である。経験的な道徳的観念が、すべての人に普遍妥当するということは、端的に不可能であるからだ。つまり、独断論と経験論とは、世界を捉える上で、双方ともに不十分なのである。

では、独断論と経験論のいずれの道もとりえないとすれば、カント自身はどのようなモデルを提示したのだろうか。彼によれば、人間の存在様式には、2通りの在り方が認められる。つまり、人間は、感性界に属するものとして、自然法則に服する経験的存在である。同時に、人間は理性的存在として、理性固有の領域である叡知界にも属し、自然から独立した、理性のみに基づく固有の法則のもとにあると考えるのである<sup>21</sup>。このように人間を理解することによって、人間は、経験的なものにも従いつつ、同時に、自らの理性によって、神などの外的・絶対的な規範を必要とすることなく、自らの道徳的規範を普遍妥当的な仕方で確立することができるのである。これを行為という観点から言い換えれば、人間には行為を決定する要因が大きく二つ存在するということになる。一つは経験的世界の影響であり、もう一つは純然たる理性の作用である。

カント自身の議論では、経験的世界とは自然法則に従う世界、すなわち自然のことであった。したがって、一見すると、「経験的存在である」とは、ただ快樂に従う人間の在

<sup>19</sup> 『純粹理性批判』, AXII

<sup>20</sup> *ibid.*, B356

<sup>21</sup> 『倫理の形而上学の基礎付け (Grundlegung zur Metaphysik der Sitten)』, IV452

り方を指しているようにも思われる。しかし、カント自身が問題としているのは、行為の選択原理に、経験的な要因が介在しているかどうかという点である。よって、この経験的な人間の在り方は、単なる自然主義的な人間の在り方だけではなく、何らかの文化的規範や社会的慣習に従った人間の在り方も包摂しうるものと考ええる。すなわち、人間はさまざまな規範に従いうる自らの在り方を認め、それを理性的であるかぎりの自分の立場から、合理的に選択することができるのである。あるいは、さまざまな規範を純粹な理性の立場から吟味することにより、よりすぐれた自己の在り方を獲得する道も開かれるだろう。

### 3.2 カント主義的文学理論としての第三項理論とその問題

ここで、経験的な人間の在り方を「文章の読み」として、叡知界を「第三項の領域」、そして理性的選択が可能な存在としての人間を「機能としての語り手」として理解すれば、そのまま第三項理論の主張と合致する。より積極的な言い方が許されるなら、第三項理論は、カント主義的文学理論として理解することができるかと筆者は考える。

第三項理論では、対象としての作品を、あくまで読み手に対しての現れであると考えている。それによって、テキスト内在的な読解手法によって生じる正解到達主義的立場（＝「モダン」）、そして「還元不可能な複数性」（＝「ポストモダン」）の双方の回避が図られていた。言い換えれば、第三項理論とは、第三項を導入することによって、「絶対的な読みというものが存在する」という独断論と、「畢竟文章の読みはその受け取り方によって変化せざるを得ない」という経験論の双方を斥けようとする、文学読解上の試みであるとも言えよう。すなわち、私達が文章を読む際には、どのような立場から読むかによって、さまざまな文章理解が現れる。そうしたさまざまな文章理解を比較しうるメタ的な視野を獲得すると、その文章理解は、他ならず、自らがどのような規範や慣習の中に存在しているのかを明らかにしてくれる。重要なのは、文章を読む際に、自分の背負っている文脈を相対化する視点と、それによって、異なる文脈を自ら模索しうる人間の在り方を手に入れることであり、カントと第三項理論は、まさにその点において合致するところが多いと言えるのである。

そして、このように第三項理論をカント主義的に捉えるにあたって、問題となるものが一つある。それは、「無意識」をどのように位置づけるかということである。当然のことながら、カントが活躍した18世紀には、まだ無意識ということが問題とされていなかった。無意識が人間理解の視点となるのは、19世紀末、ジークムント・フロイトの登場を待たねばならない。しかし、田中実の議論においては、登場人物の意識の背後にあるものとしての無意識が、メタ・プロットを捉える中で頻繁に登場している。また、無意識を利用した読みは、例えばラカン派精神分析を応用した文学理論など、ポストモダンの言説の中にもよく見られている。したがって、無意識をどう位置づけていくかは、カント主義的に第三

項理論を捉える上だけではなく、第三項理論をポストモダンの言説へと還元しないためにも、重要な論点と言える。

田中自身は、村上春樹のエッセイを引用しつつ、無意識の領域は「第三項の領域」ときわめてあいまいなかたちで連続しており、無意識の領域の奥に「第三項の領域」が存在すると説明している<sup>22</sup>。またこの際、田中はエッセイの発言に依拠しながら、無意識の領域を「地下一階」、「第三項の領域」を「地下二階」と表現しており、ここから、両者にはある種の階層関係があるようにも理解される。しかし、筆者は、無意識の領域を「意識化の問題」と「第三項の領域」の中間項のように説明するのは、第三項理論の理解にあたって不適切なのではないかと考える。なぜなら、もし「意識下」-「無意識」-「第三項の領域」という階層関係を認めた場合、第三項理論におけるメタ・プロットを読む、ということが、メタ的なものを巡って、無限遡行に陥る可能性があるからだ。

筆者は、無意識とは田中が説明するような階層関係ではなく、作品を「機能としての語り手」の視点から読み解いたときに見えてくる次元の読みとして、意識下の読みと対等に「第三項の領域」に立ち現れるものとして理解することを提案したい。ラカン派的テキスト読解の試みが示すように、無意識が示す作品世界は、それ単体で一つの閉じた意味空間を形成する。また、つまり、「機能としての語り手」の立場から物語を読むということは、「真なる」作品の読みではなく、「異なる」作品の読みを手に入れるということである。そして、その読みの背後に「作品それ自体」としての〈本文〉が存在すると考えるべきなのである。そしてこのように理解することで、作品を「第三項の領域」において読むという、第三項理論の姿もより明瞭に描き出されると筆者は考える。

以上のようにして第三項理論を整理すると、第三項理論と、それを援用した田中の物語読解との分離も容易となる。つまり、田中の文章読解とは、「第三項の領域」という視角から、さまざまに立ち現れる物語空間の差分を捉える、という読みの実践である。したがって、田中への批判が有るとするならば、それは第三項理論そのものではなく、その実践としての田中実の解釈に説得力があるのかどうかという仕方で行われる必要がある。またこれは別の言い方をすれば、第三項的に読むということは、必ずしも田中の読みへの到達を意味しないということでもある。したがって、きわめて逆説的ではあるが、田中実の言説を見ていては、第三項理論を理解することはできないのである。

## 今後の課題

以上、田中実の第三項理論について、カント主義的立場から議論を整理し、その意義を

<sup>22</sup> 田中 (2018) , p.13

確認することを試みてきた。

先にも述べたように、現在、第三項理論は、国語教育の分野で注目を浴びている。第三項理論における読みの実践は、「他者の読みと自分の読みとを比較し、相互の自己倒壊＝更新を促進する」という点で、今般の指導要領改訂で示された「主体的・対話的で深い学び」を文学において実現する良い手掛かりとなるだろう。また、「第三項の領域」を舞台とした相互理解という構造は、国語教育に留まらない応用が可能である。たとえば、文学の読みを、「異なる文化圏の思想・生活」と置き換えてみたらどうだろう。グローバル化の進展に伴い、「他者を理解する」ということは、もはや「みんなちがってみんないい」では不十分になりつつある。また、「郷に入っては郷に従え」でも同様に不十分である。他者を受け入れ、どのような公共空間を目指していくべきなのかを考えること、そして、そうしたことを考えられる人間づくりが、今まさに求められている。そうした中、他者との対話を通じて、新たな相互関係を目指していける可能性を、第三項理論には示してくれているようにも思う。

また、カント研究者の立場から言えば、第三項理論を通じて、カントをはじめとした哲学の学的蓄積を、教育を通じて社会に還元することができるのではないかと考えている。先に述べた第三項理論の可能性は、そのままカント哲学の今日的意義と大きく重なっている部分が多い。国語教育、特に文学教育を通じて、どのようにしてカント哲学の成果を社会に還元できるか。これは筆者の今後の課題としたい。

#### 引用・参考文献

- 須貝千里 (2017) 「世界観認識として、「予測困難な時代」を問い質して — 「資質・能力」としての〈第三項〉論と「故郷」(魯迅)の「学習課題」の転換—」『日本文学』第66巻第8号
- 田中実 (2018) 「〈近代小説〉の神髄は不条理、概念としての〈第三項〉がこれを拓く — 鷗外初期三部作を例にして—」『日本文学』第67巻第8号
- 田中実 (2017) 「〈第三項〉と〈語り〉／〈近代小説〉を〈読む〉とは何か — 『舞姫』から『うたかたの記』へ—」『日本文学』第66巻第8号
- 難波博孝 (2018) 「『新しい実在論』と第三項理論」『日本文学』第67巻第8号
- イマヌエル・カント (熊野純彦訳) (2012) 『純粹理性批判』, 作品社
- イマヌエル・カント (熊野純彦訳) (2013) 『実践理性批判 倫理の形而上学の基礎付け』, 作品社
- マルクス・ガブリエル (清水一浩訳) (2018) 『なぜ世界は存在しないのか』, 講談社選書メチエ
- 文部科学省 (2018a) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 国語編』, 東洋館出版社
- 文部科学省 (2018b) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 国語編』, 東洋館出版社
- 文部科学省 (2018c) 『高等学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 国語編』, 東洋館出版社

なお、本論文の掲載にあたっては、小林千枝子教授のご推薦およびご指導を頂きました。記して感謝いたします。